1-11

困難事例にみるチームアプローチの課題

認知症高齢者が地域で生活していくための支援体制

認知症ケア

地域・ネットワーク

ちいきほうかつしえん
地域包括支援センター 上馬あんしんすこやかセンター

主任介護支援専門員 なべた ひろ
銅田 浩

世田谷区上馬4-36-9

TEL 5430-8059

E-mail k-ansuko@n-friends.or.jp

FAX 5430-8051

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

世田谷区では、27ヶ所の地域包括支援センターを、社会福祉法人等に委託し、出張所単位に設置している。当センターは、同じ法人が開設している単独型通所介護施設に併設で、職員配置は3名。地区内の高齢者人口4,200人。高齢化率16%

〈取り組んだ課題〉

(事例) 80代A氏夫妻。ともに認知症。夫の周辺症状(徘徊・収集・破壊行為・場所を選ばない排泄行為)が顕著になり、それまで無関心だった長男(近くに単身で居住)と近隣のストレスが増大し、ケアマネが支援困難な状況を抱え込んでいた。このことについて

- ① 認知症高齢者の状態変化によって生じた支援体制のゆらぎやケアマネに対するサポート。
- ② 認知症高齢者の状態変化に対する介入。
- ③ 認知症高齢者と地域の近隣住民の関係に対する介入を行った。

〈具体的な取り組み〉

H18/5 開設間もない時期に、当施設に通所するA氏のことで相談員より相談があった。認知症の夫婦二人暮らしで、デイの職員は役割以上に日中の生活をカバーしているが近隣とのトラブルもあり、在宅生活が限界と思える。ケアマネも対応に悩んでいるとのこと。相談員を通じて、当センターへの相談を勧めた。

H18/6 ケアマネが来所。今後の対応について、家族、区、CW、主治医、民生委員、事業者とケア会議を開くことを当方より提案。

H18/8 ケア会議を開催。現状の問題点の整理と役割の確認。家族の意向の確認。

H18/12 A氏が体調を崩す。ケアマネに様子と家族の意向、方針を確認する。

H19/4 近隣住民より、「迷惑行為」について相談。

H19/5 近隣への理解のためのケア会議(区・家族、ケアマネ、民生委員、通所相談員、地域包括)

H19/5 A氏の夜間譫妄悪化。再び近隣の相談。

区を含めたケア会議にて、精神科専門医療の受言の方向で、家族への勧奨を行うことを確認。実施。

〈活動の成果と評価〉

今回の支援を通して、①認知症高齢者が地域で生活を継続していくために、チームアプローチが有効であることを確認できた。そして、②本人の状態が変化することで生じる周囲のゆらぎを、適切な時期にケア会議を開催することで方向性のブレが少なくなること、さらに③家族に拒否などがある場合、チームで関わっていくことで、事態が進展していくことを認識した。

なお、地域包括支援センターとしては、

- ① ケアマネや事業所が困難だと感じていることを整理すること。
- ② ケアマネが1人で困難な状況を抱え込まない支援体制づくり。
- ③ 地域や行政など、さまざまなネットワークを活用していく調整役であること。
- ④ 地域住民の理解や協力を得ること。を、役割として再確認できた。

〈今後の課題〉

地域包括支援センターの開設間もない中で、今回のケースは支援経過を通して、後手に回ったことも多く十分な支援ができなかった。しかし、チームアプローチと地域の支援体制の形成という方向性を見出せたことは重要である。

今後、よりよい支援をしていくために、

- ① 地域の中で顔が見える関係を作っていくこと。
- ② ケアマネが地域包括に相談できる「信頼関係」を築けるよう、共に事例検討を積み重ねていくこと
- ③ 地域包括の中では、三職種の中で相談しあえる体制と、スキルアップ
以上を課題としていきたい。